

## 論文要旨

学位論文題目： 子どものための物理的環境

—モンテッソーリ教育における建築・設備・家具・道具

氏名：高橋 節子

### 1. 問題

本論文の目的は、幼児教育施設における主として3～6歳児を対象とする物理的環境について検討することである。

本論文で検討した物理的環境とは建築（園舎）、設備、家具、道具である。物理的環境は教育実践において重要な役割を果たし、教育法（教育理念や教育内容）と切り離して考えることはできないであろう。しかし、このような観点から内外の先行研究を検討したところ、建築学、幼児教育学、保育学のいずれにおいても、物理的環境と教育法との関連を具体的に検討したものは、ほとんどみられないことが明らかになった。

そこで、本論文では、物理的環境を重視し、具体的なあり方を提案したマリア・モンテッソーリ（Maria Montessori, 1870-1952）のモンテッソーリ教育を例として、教育法と物理的環境の関連を明らかにしようと試みた。以下の3つの研究によって、モンテッソーリ教育の教育法と物理環境の関連を検討し、それを踏まえて幼児教育施設の物理環境のあり方を考察した。

### 2. 本論文の実証研究

#### 研究1：モンテッソーリ教育思想と物理的環境

モンテッソーリの著作12点を分析対象とし、モンテッソーリの子ども観・発達観、教育の原則、人的環境、物理的環境についての記述を取り出し、これらの相互の関連を明らかにして、その全体像を捉えた。

モンテッソーリの子ども観・発達観は、子どもは発達する可能性を持ち、生まれながらに持つ発達の法則・計画に基づいて活発な自律的活動をし、環境と相互交渉することによって発達するとまとめられた。活動の主体は子どもであり、人的環境（教師）ではなく物理的環境が子どもの自律的活動を喚起・援助するとされた。彼女の子ども観・発達観に基づいて物理環境の8つの性質が規定され、園舎から小さな道具に至るまで子どもが使用するすべての物理環境を、これらの性質に基づいて整えることが望ましいとされたことが明らかになった。

## 研究2：建築家・デザイナーによるモンテッソーリ幼稚園の実現—Goethehof 幼稚園の場合

研究1で明らかにしたモンテッソーリが理想とした物理的環境の特徴が、実際の園舎においてどのように実現されたかを、園舎の実例の分析により明らかにした。分析対象は、モンテッソーリ教育が変容せず、ほぼ純粋な形で実践されていたウィーン市の市営ゲーテ・ホーフ（Goethehof）幼稚園である。この園の室内は、1930-32年にアトリエ・ジンガー&ディッカー（Atelier Singer-Dicker, 以下、アトリエ S&D と表記）がデザインした。分析した資料は、ベルリンのバウハウス・アーカイブ（Bauhaus-Archiv）に所蔵されている資料（平面図7点、彩色されたアクソノメトリック図6点、写真86点、コラージュ作品1点）である。

資料を詳細に分析したところ、モンテッソーリ教育の物理的環境の特徴の約89%がゲーテ・ホーフ幼稚園で実現されていたことが明らかになった。特に注目されたのは、モンテッソーリ教育にふさわしい物理的環境を実現したアトリエ S&D の独自のデザインであった。その特徴は①園舎の物理的な制約を、保育室のコーナーの設置、折りたたみ式の家具によるクロークの多機能化（居間、午睡室を兼ねる）で克服したこと、②色彩計画により活動場所や家具を置く場所などを示して子どもの自律的活動を援助したこと、③子どもの体格、体力、理解力にあわせた「子どもサイズ」を実現していたことであった。これらのアトリエ S&D のデザインは、彼らのモンテッソーリ教育に対する深い理解と、ゲーテ・ホーフ幼稚園園長との協働作業とによって実現したと推察された。

## 研究3：日本のモンテッソーリ保育所の物理的環境

現在のわが国で、モンテッソーリ教育を実践していることを表明している保育所において、約100年前に提案されたモンテッソーリ教育の物理的環境の特徴がどの程度、そしてどのように継承・維持されているかを明らかにした。

郵送による質問紙調査を行い、モンテッソーリ教育を実施している保育所（M 群, 95）とそれ以外の保育所（non-M 群, 192）からの回答を分析した。その結果、モンテッソーリ教育の物理的環境の特徴を、M 群の方がより多く実現していること、日本への受容の初期と後期について見ると、両時期において M 群がより実現し、しかも、両群の差は受容後期においてさらに広がっていることが明らかになった。

M 群と non-M 群の差が顕著であったのは、①M 群は1人用の机を含め、使用人数の異なる机を複数設置していたこと、②M 群は、子どもが静かに過ごすための部屋やコーナー、午睡室の設置をより多く実現していたことであった。子どもの自律的な活動を尊重するモンテッソーリ教育にとってはこれらの設置は不可欠であろう。これらの結果は教育法と物理的環境が密接に関連していること、ある教育理念を実現するには、それに適した環境を整えることが必要であることを示した。

### 3. 討論と今後の課題

以上の3研究の結果を踏まえて、子どものための物理的環境のあり方を論じた。子どもを主体とした子どもと物理的環境との相互交渉、物理的環境を計画する際の建築家・デザイナーと教育者の役割、協働作業の必要性について考察した。そして最後に、残された課題を述べた。